

《あらいたはしや敦盛は》

—— 中世語としての「あら」をめぐって ——

四十回生 川原 賀代子

- 0、はじめに
- 1、「あな」と「あら」
- 2、「あら」+「や(かな)」の支配関係について
- 3、幸若舞曲にみる「あら」
- 4、おわりに

0、はじめに

幸若舞曲は、室町時代の資料としてよくその名称を目にするものの、国語学的にこれを扱ったものはほんの教編しかない。また、その際の扱い方としては、口語性の限界をはかるといった立場のものが主流である。これは、やはり同時代と目されるキリシタン版や狂言本などがまず、口語資料として高く評価され、これらが全体的に口語資料として検討されているためであり、そのようなことから幸若舞はどうしても後回しにされがちである。口語性という点か

ら見ると、確かに、幸若舞曲を狂言やキリシタン版と同じように扱うことは難しい。実際、教曲について音便形を調査してみたが、曲目によって音便率に差があり、(低いものでは「いふき」の四〇・六%、高いものでは「敦盛」の七五・〇%)これに反映されるように、曲目によってその文法的側面にも差があるようである。^{*1}しかし、ロドリゲスが大文典のなかで「舞(Mais)」の文体は日本で通用してゐる甚だ丁寧で上品な談話と同じである。話し言葉と書き言葉とを混合したものであって、誰にでも理解される^{*2}と書いているように、部分的であれ、幸若舞が上演された当時の話し言葉が反映され、また、その中に古語的にも現代語にも該当しないまたはそれらと性格を異にするいわば中世的特徴を持つ語が採用されている可能性は高いのではないだろうか。

前置きが長くなったが、そのような観点から幸若舞曲を

表 1

作 品 名	あ な	あ ら
竹取物語	5	0
源氏物語	172	0
梁塵秘抄	5	0
保元物語	13	0
平治物語	3	0
宇治拾遺集	26	2
平家物語(流布本)	40	1
徒然草	10	0
増鏡	6	0
義経記	2	23
曾我物語	0	3
御伽草子	25	56
毛詩抄	0	3
史記抄	0	14
蒙求抄	0	4
中華若木詩抄	0	8
天草版平家物語	1	11
天草版伊曾保物語	0	3
大蔵虎明狂言集	0	79
きのふはけふの物語	1	2

読んでいくと舞の数箇所に本稿の題目にもしている「あら
 +形容詞の語幹(名詞) +や」の形がみえる。しかし、こ
 のような形式は古代においては感動詞「あな」を文頭に置
 いた形が主流だったはずである。では、この二つの感動詞
 は国語史においてどのような様相を見せるのだろうか。そ
 こでこの「あな」と「あら」の二つの感動詞についてその
 史的考察を進めるなかで「あら」の国語史における位置を
 探るとともに、幸若舞曲におけるこの表現について幾つか
 の視点から見ていきたいと思う。

1、「あな」と「あら」

先行文献に「あな」と「あら」について示唆的に述べら

れた次のようなものがある。これは『講座・国語史3・語
 彙』の「近代語」(佐藤喜代治著)からの引用である。

——また、感動詞の「あら」も同様で、平安時代には一
 般的に「あな」が用いられている。「平家物語」で
 も(例文省略)のように「あら」という例があるが、
 「あな」という例がはるかに多い。「徒然草」には
 「あな」の例だけで、「あら」は見えない。擬古的
 な文章では「あな」というが、一般的な話し言葉で
 は「あら」と言ったものと思われる。「あら」は古
 代語から近代語へ言いかえれば雅語から俗語への変
 化を示す一つの徴標といえることができる。

このように非常に簡略に「あな」と「あら」について幾

つかの具体的な作品をあげな
 がら述べられている。しかし、
 簡略なだけに非常にあいまい
 であり、それぞれの消長の具
 体的な時期については何もふ
 れられてはいない。そこで、
 まず古代から近世初期までの
 幾つかの作品についてそれら
 の使用状況についてみていき
 たい。^{*} 表1を一見してわか

るように、確かに「あな」と「あら」とは、ある時期を境としてその出現が逆転的であるようにみえる。『義経記』や『曾我物語』は大体鎌倉時代後期から室町時代前期頃に成立したと見られるが、後者の「あら」の三例を次に挙げる。

○天の岩戸にとりこもらせ給ひせし時「あらおもしろ」といひそめたまふ(二二〇—二二一)

○夢の心ちしてあらめづらしと御わたり候やささらに現共おぼえず候(四一六—二二三)

○二の宮の姉いひけるはあらありがたの御心ざしの程や是をわするまじき事とおもひ給ひて(四一七—一六)

ここに既に「あら+や」の形がみられる。(この呼応関係については次章であらためて述べる)次の、『御伽草子』まで時間的幅はあるものの、それ以前の状況から考えると、やはりこの頃が「あな」としては衰退の、そして「あら」としては出現の時期であるにとられるのではないだろうか。更に「あら」の出現を推し測るものとしてそれ以前の資料における「あな」との共存状態にあった例を今少し眺めてみたい。

○法師「あら貴と」といひて手をすりて額にあてゝたちはしりぬ(宇治・三〇九—九)

○女人出来ておなじく渡りけるがたゞ流れに流れて「あら

かなしわれをたすけ給へ。あの御坊」(宇治・三八四—二二) ○よろづの心すむまゝに「あら思はずや、あづまにもこれほどのゆうなる人のありけるよ」(平家・二六五—二二)

『宇治拾遺集』は二例とも「あら」+「や」の形を取っているものの、この両者ともに「あな」の数が圧倒的に多い。これらを総括的に見ると、概して「あら」については中世初期をその出現の最も早い時期と推定できそうである。しかしあくまでも、一般的な語として出てくるのは『曾我物語』以降、つまり、鎌倉時代乃至室町時代前期ということになろう。

さて、それぞれの時期の大体の目安はついたものの、『曾我物語』以後の作品にみられる「あな」の例についてはここで考えていかなければならない。『御伽草子』においては数量的に多いので検討することにしてまず『大草版平家物語』を見ると

○それもまた公家たち拍子をかえてあなくろぐる黒き頭かな (ana curogoro curogui tō cana) (七一五)

とあり、この表現はそのまま龍谷大本の『平家物語』にも見られるため、単なる継承であるということがわかり、この例は十六世紀末に実際に「あな」が使用されていたということを示すことにはならない。また、『きのふはけふの

物語』の例では

○二郎といふ子寺からきよかきしてかへり、おや共にみす
 れは、さてうれしや、とてよろこぶ。はくの申しけるは
 手はかりでもない。をとなくころもあるとみえた。なせ
 に。きよかきのおくに、あなかしくしらふとあるほとに
 (上七八〇)

のようになっているが、これは、「穴」が掛け詞として使

表2

物語名	あな	あら	物語名	あな	あら
文正さうし	2	0	梵天国	2	1
鉢かつぎ	0	2	浜出草紙	0	1
小町草紙	0	2	一寸法師	0	1
御曹子島渡	0	4	さいき	0	2
木幡狐	0	1	横笛草紙	1	0
猿源氏草紙	1	6	酒天童子	0	5
物くさ太郎	10	3	福富長者物語	6	2
さざれ石	0	1	あきみち	0	2
蛤の草紙	0	6	三人法師	0	14
小敦盛	0	2	秋夜長物語	3	0

われるためにこのように「あな」が用いられているのであ
 る。よって、これもそう問題にはならない。

そこで、次に『御伽草子』を見ていくことにするが、そ
 の際、「あな」のみをみるのでなく、「あら」と対比させ
 ることです。その状況を把握していきたい。まず物語別に見て
 いくと表2のようになる。さらに、分かりやすくするため
 に物語名だけをあげてみると、

①「あな」のみ

文正さうし・横笛草紙・秋夜長物語

②「あら」のみ

鉢かつぎ・小町草紙・御曹子島渡・木幡狐・さざれ石・
 蛤の草紙・小敦盛・浜出草紙・一寸法師・さいき・あき
 みち・三人法師

③共存するもの

物くさ太郎・梵天国・福富長者物語(以上、「あな」優
 勢の中に「あら」がはいっているもの)
 猿源氏草紙(「あら」優勢の中に「あな」がはいって
 いるもの)

となる。共存するものはあるものの、凡そにおいてこの二
 つの感動詞はその出現する物語を異にしている。先の全体
 的な流れや『御伽草子』内における「あな」と「あら」の
 比率から分かるようにこの時代においては「あら」が優勢

であるはずである。そこで、「あな」のみが使用されているもの、またその数が多いものについて次に見ていくことにする。「文正さうし」の例に次のようなものがある。

○門の程より、「あなめでたや、女子はもつべき物なり。

國司の御舅になるぞや。みな用意して御供申せ」と申つゝ、

(三八一九)

これには頭注がついており、異本の例が記載されている。そのなかから本稿に関係のある部分のみをあげる。

○「あらめでたや、まことに女ごはもつべき物なり。(市

古貞二氏)「家蔵本

○「あらめでたや、大ぐうじどのゝきんだちをむこにとり

まいらすべきなり。」丹緑本

このように「あな」の部分は異本では「あら」となっているのである。本章の冒頭にあげた先行文献の記述を産交にすれば、擬古的な文章では「あな」がみられるということ、そのように視点から該当する物語を考えてみたが、それらがほかのものと比較してより擬古文的だとは言いがた、また先にあげた「文正さうし」の例からも別に「あな」が用いられる必然性はないようである。そういった意味から、『御伽草子』においては、「あな」の現れ方というのは、その文章の特徴とそのまま関連するというより、それが出てきたものと「あら」が用いられているものとの作者なり

成立過程なりの違いを示しているように思える。また、別の側面からこれら二つを見ると、非常に互換的であるということが言えよう。更にそのことを裏づけるという方向で再び『平家物語』と『天草版平家物語』の例で考えていきたい。これらは、『平家物語』が「あな」を優勢的に取り、『天草版平家物語』が「あら」を優勢的に取るものであるが、これらのつくった語を次に表化させてみた。(『平家

表3

語	あな	あら	語	あな	あら
あさまし	1	2	おそろし	3	0
にく	1	2	やさし	1	0
むざん	7	2	心う	2	0
めでた	1	1	あはれ	1	0
いまいまし	1	1	はしたな	0	1
ふしぎ	3	0	をん恋し	0	1
おびただし	2	0	かたじけな	0	1
いとをし	2	0			

物語』の「あら」の用例1、『天草版平家物語』の「あな」の用例1は表の対象外)表3を見ると、「あな」と「あら」で共通した語を取っていることが分かる。『天草版平家物語』では「あら」をつけずに「あさましや」などという例もあるのです、これらを総合的に考えると、やはり『平家物語』で「あな」とされたものが『天草版平家物語』では「あら」となることが多かったのではないかということが言えよう。

以上、「あな」と「あら」について国語史的立場からみてきたわけであるが、ここまですべてとめてみると、(1)「あな」は古代において盛んに使用され、中世に至って衰退の途をたどる。

(2)それに次いで「あら」が中世初期から出現し、それまで「あな」が用いられていた語に多く上接する。

(3)このように「あな」と「あら」とは国語史において交替的に(先に出した互換性というのとは史的な尺度で見た場合、交替という表現のほうがより適切かとおもわれる。)出現するものである。

というようになる。この結果は「あら」に視点を置いた立場でいうと、この感動詞は中世の初期頃から少しづつみられ、中世になるとそれまで「あな」が担当していた部分において使われることが多くなり、いわば「あな」に交替す

る形で中世の会話や心中語などに多く出現するという様相を呈しているということが言える。

2、「あら」と「や」の支配関係

前章では「あら」を通時的に見てきたが、ここでは中世によくみられる「あら」+「や」の関係について共時的に見ていきたいと思う。この「支配関係」という言葉は『日本大文典』の訳注者である土井忠生博士の訳語であるが、それは次のように説明されている。

○ARA(あら) 接続する名詞に従っていろいろな感情を示す感動詞であって盛に用いられる。呼号する代わりに使はれるものである。文首に置きYa(や)かCana(かな)かが文末にきてそれを承けるのが、支配関係の規則である。(四六〇頁)

このロドリゲスの記述によれば、その時代、「あら」は「や」と呼応する形で用いられていたというのである。そこで、具体的に資料を見ていくことにする。表4を見てわかるように「や(かな)」で結ばれていない例は少なく、この結果からもロドリゲスのいう支配関係が向うことができる。ただし、『大蔵虎明本狂言集』はくわしく見ていく必要があるのです、これは後で述べることにして、まずその外の例を先に見ていく。

表4

作品名	あり	なし
義経記	2 2	1
曾我物語	2	1
御伽草子	5 3	3
毛詩抄	3	0
蒙求抄	3	1
中華若木詩抄	8	0
天草版平家物語	1 1	0
天草版伊曾保物語	3	0
大蔵虎明狂言集	6 0	1 9

○「あらあさまし、如何なる不思議にてか候やらん」『義経記』（一一七—九）

○情もことに在原の、おもかげは、業平のあらはづかしわが姿『御伽草子』『小野小町』（九〇—一五）

○「あらうらやまし。あれ一口給はり候へかし。』『御伽草子』『梵天国』（二七六—二二）

○われらもともに浮かぶなり、あらかたじけな『御伽草子』『酒天童子』（三七三—一）

○アラ裏カヘリ衆ノ使ナルトコソ『蒙求抄』（三三三—〇—ウ）

このように形容詞の語幹で終わっている。

次に問題となる『大蔵虎明本狂言集』の場合、四分の一が支配関係がないものが占めている。これを更にくわしく

表5

分類	あり	なし
脇狂言之類	6	0
大名狂言之類	2	0
聳・山伏狂言之類	—	—
鬼・小名狂言之類	2 6	0
女狂言之類	7	7
出家座頭狂言之類	1 4	0
集狂言之類	1 1	0
万集狂言之類	5	1

見たのが、表5である。表中に表れているように、「女狂言之類」において、14例ある「あら」のうちの半分が支配関係のない形である。「あら」に続く語は「にく」一例、「しやうだいなし」二例、「おそろし」一例、「うらめし」一例、「物々し」一例「心うるし」一例で、ほとんどが形容詞の語幹のままの形である。（最後の一例については不明）

このように、多くの語が支配関係を持たないのであるが、「女狂言之類」がその外のものとは異なるところといえば、やはりアドとして女性が登場することが圧倒的に多いということであろう。しかし、狂言において男女の位相差というのはほとんど表れないということは、昨年の卒業論文*で音便調査を行った際に明らかになったことである。実

表 6

位相	あり	なし
男	4	5
女	3	2

際、調べてみると、次のようになる。

表 6 に表れているように、この場合、結果的には「あら」＋「や」の関係がないものが多いということになる。しかし、その外の類に

登場するのは男女の位相差でいえば、男性がほとんどであり、それらにおいては「あら」＋「や」の支配関係があるものばかりであるので、男性においてその支配関係が緩いものであったとは言いがたい。しかし、表 4 に置いてみられたように一旦「あら」＋「や」の支配関係が定着しつつあった中世期の半ば頃から比較すると、この『大蔵虎明本狂言集』の「女狂言之類」はそれらとは違った傾向をもっているということが言えよう。また、言い換えれば、やはりこの中世期において「あら」はロドリゲスがいうように「や(かな)」と支配関係をもつことが一般的でありそのことが中世語としての「あら」を特徴づけるものであろう。

3、幸若舞曲にみる「あら」

幸若舞曲についてまず簡単に述べておきたい。ここで扱ったのは「大頭左兵衛本」の二十六曲一揃え^{*}である。これ

は、笹野堅氏によると幸若舞の当時の二大流派の幸若流と大頭流の最古の正本とされており、書写されたのは室町時代後期とされているものである。また、この大頭流の一派は天正十年(一五八二)に本格的に筑後に下ってそこで活動しているということである。^{*}このことは、『日葡辞書』や『日本大文典』に数多く引用されている(『日葡辞書』に六六例、『日本大文典』に一八七例)幸若舞曲との関わりを考えると興味深いところであるが、実際詞章の照合を行ってみたが、直接的な原典と考えられるような関係ではないようであった。また、それぞれの動詞の音便状況についても調査を行った結果、『日葡辞書』で九五・二%、『日本大文典』で八四・八%とかなり高く、このような側面からも何か別の舞の本例えば、『天草版平家物語』のようなローマ字版が介在していたと考えられる。

さて、このような点を押さえて実際幸若舞曲にどのような形で表れているか見ていくことにする。「大頭左兵衛本」に表れる「あら」は一四五例で、「あな」が二例である。曲目別にそれぞれ見てたものは表 7 のとおりであり、これから「あな」は「新曲」にだけ見える例である事がわかる。このことについて直接的な根拠としてこの「新曲」の素材との関係が考えられる。「新曲」は『太平記』の「一宮御息所事」との関連が深く、曲の冒頭の一部分を除いて「そ

表7

曲 目	あら	あな	曲 目	あら	あな
日本紀	—	—	山中常磐	1 0	0
いるか	—	—	しつか	6	0
たいよくはむ	5	0	烏帽子折	2 5	0
大臣	1 8	0	四国落	4	0
いふき	4	0	とかし	3	0
はま出	1	0	笈さかし	1 0	0
馬揃	1	0	清重	1	0
硫黄島	1	0	高たち	4	0
木曾願書	1	0	和泉か城	6	0
文学	5	0	小袖乞	7	0
敦盛	1 3	0	つるき讃談	1	0
築嶋	6	0	夜討曾我	1 0	0
なすの与一	3	0	新曲	0	2

の比みやすてにうるかふりめされ。∴」の部分から若十の表現の違いはあるものの、よく素材の詞章を受け継いでいるようである。そこで、問題の部分を見てみると、

○目枯レモセズ守リ居タリケルガ「穴無端ヤ縦主アル人ニテモアレ又何ナル女院、姫宮ニテモ坐マセ∴」『太平記』(二五六—四)

●めがれもせずまほりるたりしが。あなあぢきなや。たとひ主あるひとにてもあれ。又女院姫宮にてもおはせよ∴

「新曲」(五四四—五)

○難風ニ逢テ海ニ沈ミ給ケン其装束ニテゾ有ラント語テ「穴哀ヤ」ナンド申給ケレバ∴」『太平記』(二六二—二二)

二二)

●難風にあふて海にしませ給ひし、其しやうぞくにもてもやあるらん。あなあはれさよ。なむどいゝさたするを∴

「新曲」(五五一—二)

というようにうまく対応した形で、「あな」が「新曲」においてもそのままの形で表れてくるのである。しかし、見方を変えれば、詞章は厳密には継承されておらず、(例えば先の例でいえば、『太平記』では「申給ケレバ」となっているところが「新曲」では「いゝさたするを」となっていることなど)その意味ではわざわざ「あな」をもちいなくとも、その外の曲のように「あら」を用いることもできただけである。又、『太平記』のその外の「あな」が用いられているところを「新曲」では省略していることもある。(例えば、「穴不思議ヤ」というところを「新曲」では「ふしきヤ」となっている例など)これを考えていくためには、やはりこの数少ない例では非常に難しいが、先学^マに幸若舞曲の擬古的な要素を指摘したものがあるので、それをこの場合想起することも可能である。つまり単純に前の詞章を継承したのではなく、その当時一般的に用いら

表8

曲目	あり	なし	曲目	あり	なし
日本紀	—	—	山中常磐	10	0
いるか	—	—	しつか	4	2
たいしょくはむ	4	1	烏帽子折	24	1
大臣	18	0	四国落	4	0
いふき	3	1	とかし	3	0
はま出	1	0	笈さかし	10	0
馬揃	1	0	清重	1	0
硫黄島	1	0	高たち	3	1
木曾願書	1	0	和泉か城	6	0
文学	5	0	小袖乞	6	1
敦盛	12	1	つるき讃談	1	0
築嶋	6	0	夜討曾我	10	0
なすの与一	3	0	新曲	—	—

ていた「あら」を避けてそのまま「あな」を採用することによって前代的な要素を盛り込もうとしたのではないかと考えられる。この「新曲」に表れた「あな」は非常に例外的で、同時にこの曲目と他の曲目との差という「大頭左兵衛本」内部構造における問題が予想されるわけである。この点については、今後、他の事象を加味して考えていくことになるだろう。

次に「あら」+「や(か)」の支配関係についてみてい

くことにする。これらの関係を曲目ごとに見たのが表8である。「あら」一四五例中支配関係が成立しているのは一三七例である。支配関係が成立しないと思われる例を次に列挙する。

- ①あらうらめしの人の言葉の「たいしょくはむ」三八—三
- ②あらおろかなりむねきよ「いふき」一三四—一
- ③あらふかくなりとよあつもりよ「敦盛」二二四—七
- ④あら浦山しの京藤太と。「烏帽子折」二八六—三
- ⑤あら情けなし源太「しつか」三五二—一三
- ⑥あら面白の寺への「しつか」三五七—一〇
- ⑦つくへと見てあら面白と「高たち」四三〇—一四
- ⑧あらかたしけなさと申て「小袖乞」四八七—一三

①④⑥⑦はこれまで見てきたように形容詞の語幹に助詞などが続いている形であるが、②③⑤⑧はそれらと異なっており、②③は形容動詞の終止形を取り、⑤はク活用形容詞の終止形が、そして⑧は形容詞の語幹に「さ」がついた名詞化したものに「よ」が続いている。「あら」に名詞が続くことはほかにも見られるのであるが、終止形の形で終わっているものはこれまで見てきた資料では見られなかったものである。ただ、これまでの資料に見られた形容詞のク活用ものについては、例えば「あさまし」を語幹とも受け取ることができるし、またその形を終止形と同じく

していることからそのように考えることも可能である。又、このことを幸若舞曲に表れた例と引き付けて考えるならば、このような形容詞シク活用の語幹が「や」との支配関係を離れた例などからその外の終止形を誘引した要因の一つではないかと考えられる。要因の一つといったのはやはり、数多くの感動詞の影響も無視できないと思われるからである。よって、ここに表れた新しい形はその後、「あら」が「や(かな)」との支配関係を持たなくなっていくその兆候を示すものだとも言えるのではないだろうか。

最後に幸若舞曲にあらわれた「あら」に続く語についてふれておく。感動詞「あら」は通常会話文や心中語に用いられ、狂言集などでも会話か心中語、歌などで用いられていた。それに対して、幸若舞曲では会話・心中語以外でも用いられている。一四五例中会話や心中語以外で用いられているのは三〇語が「いたはし」である。この語は会話文中などで用いられているものと合計すると四二語にもなり、全体の三分の一弱を占めている。その外の語で多いのは「面白」「ふしき」「口おし」の八語、「むざん」「ありかた」の五語。「めてた」の四語だが、これらも「いたはし」に比べるとはるかに少ない。特に会話文以外で用いられる「いたはし」は小稿の題にもしているように「あらいたはしや十人物名」という形がほとんどであり、いわば、

幸若舞曲における特徴的な表現となっている。このように、会話文以外というのは、その外の資料における会話文に対する他の文というわけにはいかない。何故ならば、幸若舞曲は語り芸能としての基盤を有するからである。よって、会話文以外で表れたものも、結局は舞手の、または幸若舞曲の作者の口語の反映と考えられるのである。そういう意味においては幸若舞曲は別段会話部分に限らずその当時の言葉が反映されているとも考えられるのである。しかし、この「あらいたはしや」については、そのもちいかたに用い方については、これを多用することによってリズムを生じさせるといった文学的效果として幸若舞曲的手法と捉えたほうがよさそうである。

4、おわりに

感動詞「あら」は、中世初期ごろから「あな」と交替するような形で表れ、中期以降「や(かな)」と呼応する形式をとっているのが一般的であった。これは、近世頃にはその支配関係がなくなっていくことから非常に中世的様相を呈していると言える。そして、この「あら」は幸若舞曲において多く用いられ、特に、「いたはし」を多く下接語としてとり、幸若舞曲的表現となっている。又、幸若舞曲にみられる表現の中にそれまでのものとは異なった形で支

配関係がくずれているものがあり、その点は更に検討していくべきところであった。一方、「大頭左兵衛本」の内部構造の問題として一曲だけ「あな」を用いた「新曲」とその外の曲との関係についても、正本成立の問題から再考する必要があるように思う。以上が、これまで述べてきたことの簡単なまとめである。

今回の調査はまだ幸若舞曲の特徴をいかしたものは決して言い難く、幸若舞曲の研究としてはまだほんの基本調査でしかない。しかし、同時代の資料や、幸若舞曲の素材となったものとの比較を続けていく中でその幸若舞曲の言葉というものが少しづつでも明らかにっていくのではないだろうか。そしてその積重ねが室町時代語のあるいは中世語の研究における幸若舞曲活用の基礎となるのではないかと思う。

《注記》

※1 庵途裕子氏の「幸若舞曲の語法―その口語性の限界―」(国文五二)では毛利家本(幸若系)の十四曲を連体終止、係り結びの乱れ、サ行イ音便などの項目別に調査されてその曲目ごとに結果が異なるとされている。

※2 土井忠生訳注『日本大文典』より

※3 これらの調査に使った本文および索引は以下の通り

- 竹取物語 日本古典文学体系「竹取物語」
九本対象 竹取物語索引(笠間書院)
- 源氏物語 源氏物語大成、巻四、索引(中央公論社)
- 梁塵秘抄 梁塵秘抄、本文、索引(武蔵野書院)
- 保元物語 日本古典文学体系・保元物語総索引(武蔵野書院)
- 平治物語 日本古典文学体系・平治物語総索引(武蔵野書院)
- 宇治拾遺集 日本古典文学体系・宇治拾遺物語索引(清文堂)
- 平家物語 日本古典文学体系・平家物語総索引(福岡教育大学内)
- 徒然草 徒然草総索引(至文堂)
- 増鏡 増鏡総索引(明治書院)
- 義経記 日本古典文学体系・義経記文節索引(清文堂)
- 曾我物語 日本文学体系・曾我物語索引(至文堂)
- 御伽草子 日本文学体系・御伽草子索引(笠間書院)
- 毛詩抄 抄物資料集成 六巻
- 史記抄 抄物資料集成 一卷
- 蒙求抄 抄物資料集成 六巻
- 中華若木詩抄 中華若木詩抄 巻上・中・下 文節索引
笠間書院

● 天草版平家物語 天草版平家物語の研究(小学館)

● 天草版伊曾保物語 天草版伊曾保物語の研究

(風間書房)

● 大蔵虎明本狂言集 大蔵虎明本狂言集の研究、上・中・

下 索引八冊 (表現社)

● きのはけふの物語 きのはけふの物語、本文および

び索引 (笠間書院)

※4 『中世末動詞音便—外国資料と狂言本を中心に—』

中で述べたことだが、「女狂言之類」考を用いた位相的な立場からの音便調査によって、この資料には男女の差は見られないということがわかった。

※5 『幸若舞曲集・本文』笹野堅編(臨川書店)を使用した。

※6 『幸若舞曲考』麻原美子緒(新典社)の中の第四章二節「幸若舞の衰退」参照

※7 これは※1で既出した「幸若舞曲の語法」で述べられている。

《参考文献》

『幸若舞曲集・本文』笹野堅編(臨川書店) 昭和四九年

一月一五日春 初版

『幸若舞曲考』麻原美子著(新典社) 昭和五五年九月二

○日初版

『幸若舞曲の語法—その口語性の限界—』庵谷裕子

国文五一